

家業のお茶を原点に、 文化伝承業として事業を展開

有限会社長田茶店 （鳥取県米子市）

白壁が昔の面影を残す町で二百年にわたって茶店一本で商いを続け、常に先駆的な取り組みに挑戦してきた長田茶店。その歴史に伏流水のように流れるものは、老舗の伝統を大切にしながら、常に時代の流れに応じて変わろうとする企業精神である。



白壁が残る岩倉町の本店（写真提供：長田茶店）

繁栄の面影を伝える 町並みと老舗

山陰の商都として知られる鳥取県米子市。ビルやホテルなどが立ち並ぶ中心市街地の中で、多くの回船問屋が軒を連ね活発な商いを繰り広げたという面影を今なお残しているのが岩倉町である。その一角にあるのが、今年で創業二百年を迎える有限会社長田茶店だ。長田茶店の歴史は四百数十年前にさかのぼる。もともとは岡山県の北部（現在の真庭市勝山）で暮らしていたが、周りの家々とともに米子に移住した。そして、造り酒屋や旅籠、貸し蔵などの経営を経て、享和元（一八〇一）年から茶店一本で商いをするようになった。

「かつては、静岡や京都といった産地から行商の方がお茶を運んできたり、北前船で茶つぼを運んでいたようです。その当時の茶つぼは今でもお店にありますよ」。こう語るのは長田吉太郎社長である。長田社長は商売を始めてから十二代目、長田茶店になってから七代目の社長である。長田茶店では四代前から社長は吉太郎を襲名しており、長田社長は四代目の吉太郎となる。

健康を重視して 有機栽培茶に挑戦

長田茶店は、お茶屋一筋をモットーに山陰一円への卸売りを展開するとともに、抹茶の量り売りやスパーへの卸、東京へのアンテナショップの設置など、業界でも先駆的な取り組みに挑戦してきた。その中でも、長田茶店の名前を全国に知らしめたのが有機栽培茶である。長田茶店は、四十年くらい前から地元の大山のふもとでお茶の栽培に取り組んできた。山陰の名峰といわれる大山のふもとは、戦後になって多くの開拓者が入植し、厳しい自然環境の中で農業に取り組んでいた。そうした開拓者の活動を知った長田茶店は、少しでも活動を手助けしようと、開拓者にお茶の栽培を提案したのだ。

「かつては、静岡や京都といった産地から行商の方がお茶を運んできたり、北前船で茶つぼを運んでいたようです。その当時の茶つぼは今でもお店にありますよ」。こう語るのは長田吉太郎社長である。長田社長は商売を始めてから十二代目、長田茶店になってから七代目の社長である。長田茶店では四代前から社長は吉太郎を襲名しており、長田社長は四代目の吉太郎となる。

家業の原点を忘れずに 新しい道を模索

本店がある岩倉町周辺では二十数年前より「しょうじき村まつり」が開催されてきた。これは、地元の人たちがこの地で商いができることへの感謝の気持ちを込めて手づくりで開催したもので、長田茶店の三代目も中心的な役割を果たしてきた。十八回を重ねた後に、残念ながら中断したが、一昨年には七年ぶりに復活した。その原動力となったのは長田社長だ。

「販売に直結するイベントではないですが、集まってくれる人たちのほのほとした表情を見ると、やって良かったなと思いました」と、長田社長は振り返った。その言葉からも地域に密着した老舗の姿勢が伝わってくる。

創業二百年を迎えようとする長田茶店は、家業を見失うことなく、それを原点とした展開を視野に入れながら、常に新しい道を追い続けている。

販売するだけであつたが、栽培まで手掛けるようになって、ある思いが強くなった。それは生き生きとしたお茶を作つて、お客さまにもイキイキしてもらいたいということだ。健康と食の安全・安心を追求しようと考えたのだ。「そのためには、茶葉を育てる土も生き生きすることが必要です。そこで『ネッカ堆肥』を使つて栽培しました」と、長田社長。広葉樹の樹皮を蒸し焼きにして作った木酢に炭を混ぜたものをネッカリッチというが、ネッカリッチと落ち葉や家畜のふんなどを混ぜたのがネッカ堆肥で、長田茶店では炭も中国地域産のものを使った。

そうした取り組みを続ける中で、有機栽培という言葉がマスコミなどで使われるようになった。調べてみると、これまで取り組んできたことは有機栽培であることが分かった。

「そこで三代目は有機栽培を前面に出すとともに、全国の仲間たち呼び掛けて有機栽培茶協会を設立し、技術向上や普及に向けた活動を始めました」と、長田社長は言葉を続けた。こうした業界内の広がりとともに、日本人の生活と密着

有機栽培を契機に農家や消費者、販売店、バイヤーなどとの交流も深まってきた。と同時に、健康と食の安全・安心を重視する長田茶店の企業姿勢は市場からも高く評価され、有機栽培茶の商品数が日本一多い企業となった。

変わらないために変われるか

長田社長には先代から残された課題がある。それは「変わらないために変わるか」ということだ。あくまでも茶店として生きていくために、茶を生かした新たな展開をどう図るかということである。

「お茶以外の分野で事業を展開することは考えていません。といて、お茶の販売だけを事業とするものでもありません。そこで一昨年に打ち出したのが『文化伝承業』という考えです」と、長田社長は語る。お茶という商品を販売するだけでなく、日本人の生活と密着



有機栽培茶を中心とした商品（写真：阿部 章仁）



大山のふもとでお茶を栽培する農家の人たち（写真提供：長田茶店）